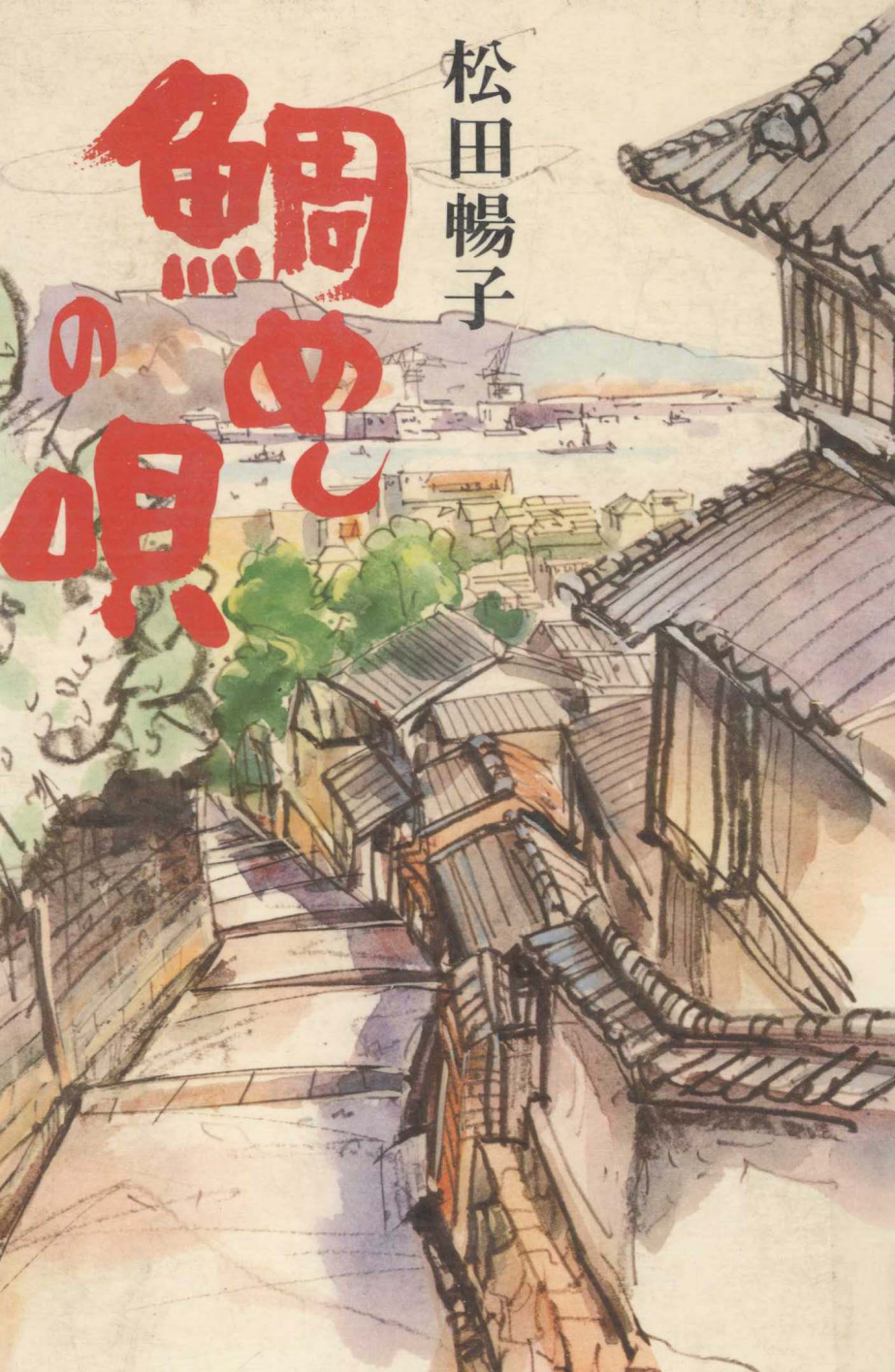


松田暢子

魚問
のめ
唄



＊検印省略

鯛めしの唄

0093,001119,8001

＊落丁・乱丁本は本社
またはお求めの書店で
お取替えいたします。

定価 六八〇円

発行日 一九七六年十二月三〇日

著者 松田暢子

発行者 竹内肇

発行所 株式会社三笠書房

東京都新宿区戸山町三五番地

電話東京〇三(二〇三)七七八一(代表)

振替口座東京三一二二〇九六

郵便番号一六二

誠宏印刷／宮田製本

©松田暢子

鯛めし
の
唄

三笠書房

目次

第一章	せとうち弁当	7
第二章	再建の道は遠く	35
第三章	昨日と今日の谷間	61
第四章	裏切りの綾に泣く	86
第五章	沈みゆく老舗	111
第六章	愛と友情と夢と	141
第七章	恋歌と男の俠気	169
第八章	温りの春の使い	196
第九章	哀愁瀬戸の歌声	223

鯛
め
し
の
唄

第一章　せとうち弁当

一

「とにかく一日上り下りで百本近うも通った長距離列車が、明日から四分の一に減ってしまうんやからな」

「じゃ、駅弁も四分の一に……」

「い、いや。そんなことはあらへんと思う。なんちゅうても尾道の駅弁は人気があるからな。そう急には減らん思うが……」

番頭の国戦爺は自分にいいきかせるように否定したものの、いらだちはかくしきれない。
「せとうち弁当」の調理場は、明日の仕込みに判断がつかず、従業員たちは口々に自分の憶測をしゃべり、騒然としていた。

「なんせ、長距離列車の数が減ったうえに、通る時間が悪いわ」

「そうや。朝早うか夜遅うやもんな。せめて、おひるに一本通ってくれたらなあ……」
「ともかく番頭さん、早う決めてくださいよ。米洗うとかいかんし、材料の仕込みかってせんならんし……」

しかし、番頭は決断が下せず、養女の亜紀子に意見を求めた。

「私は、いつもの三分の一と踏んでいるんですけど」

「えっ？ 三分の一いうと百？」

「まさか。なんぼ少のうても百五十は出るよ……」

「いや、二百はいくわ！」

「あほう、そんなようけ出るかい。お嬢さんのいうとおり、百がいいとこじゃ……」

「なにッ、百五十は出るわい……」

「うるさい！ おまえら黙っとれ……お嬢さん、これはやっぱり旦那さんに」

番頭はさすがのような目で亜紀子を見つめたが、亜紀子は力弱くうなずくしかなかった。

明日——「ひかりは西へ」のキャッチフレーズをかかげて、山陽新幹線が営業を開始する。ダイヤは大幅に改正され、山陽線の長距離列車は四分の一に削減された。かつては山陽線の主要駅で、瀬戸内海行楽の一つの拠点であった尾道の街は新幹線からはずれ、とくに伝統の味を誇る駅弁の老舗「せとうち弁当」は、いちばんの被害者の立場に立たされようとしていた。

しかも、その被害がどの程度のものになるのかさえ、だれにも判断がつかない。実は、「山陽新幹線は尾道を通らない」とわかった段階から、対策は立てておくべきだったが、経営者、

大谷守之助には時代の変転に対処する才覚も資金もなかったのだ。といって、守之助をだれが責められようか？

人は習慣の動物であり、静かで温暖な尾道に生れ育ち、長年を駈奔一筋に打ち込んできた男の身になって考えるならば、立ち上がって対策を立てるより、新幹線の方が早く開通してしまつたという実感の方が強かつたにちがいない。

あとになって、尾道の実力者たちは、〃新幹線誘致に尽力しなかつた〃ことを反省するのだが、いまは、時代に取り残されようとしている者の悲しみが、守之助をさいなんでいた。

その守之助は酒に埋没する日々を重ね、酒量は次第に多くなり、持つて行き場のない忿懣ふんまんと自分の非力を、酔いにまぎらわそうとしていた。

「おとうさん、番頭さんが明日のお弁当の数、いくつくらいにしますかって？……大体、百か百二十くらいでどうかしら……仕込みの都合があるから早く決めないと……」

店から茶の間に入ってきた亜紀子は養父の顔をのぞきこむようにいったが、守之助の目は血走っていた。

「うるさい！ 百でも百二十でも勝手にしろ。千代、酒だ！」

養母の千代はおろおろするばかり、亜紀子に助けを求める表情だ。

「おとうさん……お願いだから逃げないで。明日、お弁当がいくつ売れるか自分の目で確かめて……これから先、お店をどうすればいいか、ちゃんと考えてよ。ね、おとうさん……お願い。もう、お酒はやめて！ そんなにのんだら、体をこわすだけじゃないの。おとうさんの肩には、

私たちやお店の人の生活がかかっているのよ！」

「うるさい！ やかましい……おまえらにオレの気持ちかわかるカッ」

いうより早く、守之助の右手は亜紀子の頬を張りどばしていた。あわてて千代が駆けより、亜紀子を抱き起したが千代には守之助を制するだけの力がなかった。

「あなたッ、そんな乱暴な……亜紀子は嫁入りまえの娘ですけんね、怪我でもさせたらおおごとですが……」

立ち上がった守之助は、お膳のものをひっくりかえすと戸棚から財布を出し、妻と娘を突きのけ、この騒ぎに奥をうかがっていた従業員たちも突きとばすと、駆け出すようにして店を出て行った。

そのとき、養父に殴られた亜紀子の胸には、「おかあさん……」と、養母の千代ではなく、幼かった日、生木を裂くようにして別れた生みの母のミツ子の姿があった。亜紀子は、日常の現実から孤独の世界に落ち込んだとき、いつも母ミツ子を求めてしまうのだ。

——それは、亜紀子が八歳のとき。昭和三十八年五月のことだ。佐渡で水商売をしていた母娘のもとへ、広島から祖父の加平が訪ねてきて、強引に亜紀子を引取って育てるといい出した。母のミツ子は祖父の説得に従って、亜紀子を手放すことを承諾したものの、新潟へ向かうフェリーの乗り場で再度懇願した。あの日、日本海は恐しいばかりに青かった。

「ミツ子、いい加減にせんか。水商売のおまえに、子どもが育てられるわけがなからうが。亜

紀子、さア、行こう……」

祖父加平の頑丈な手に強く引かれて、幼い亜紀子はタラップをのぼったが、母から離れたくない気持ちで絶叫になった。「おかあちゃん！」「亜紀子……」抱き合う二人をもぎ放し、その背後で出港を告げる汽笛が大きく鳴っていた。

「おかあちゃん！」

「亜紀子！」

いわば生木を引き裂くようにして別れねばならなかった母と娘は、以後、消息さえも聞かない。というのは、途中、祖父の加平が尾道駅で急死した。八歳の亜紀子は「せとうち弁当」の大谷夫妻に引取られ、養女として育てられてきたからだ。広島に加平の家にも、大谷夫妻は連絡をとったが、加平はすでに一人暮らしの身で親戚もなかったという。いま、二十歳になった亜紀子の胸の底には、いつも母ミツ子の面影が生きていて、孤独に突き落されたとき、日本海の青さとともに、「亜紀子！」と、呼びかけた母ミツ子の姿が甦ってくるのだ。

一一

瀬戸内海も尾道あたりの海はまるで湖のようにおだやかだ。その海そいの小さな旅館の一室で、垢抜けした感じの女と土地の男らしい二人が話合っている。

「ねえ、辰さん、大丈夫やろうか。新幹線で尾道の駅弁は売れんようになってるんですよ。」

そこへ、うちみたいな余計者が押しかけて……」

「だから、給料はいらんいうたんや。心配すんな。〃せとうち〃の大将が胸叩いて、引受けてくれたんじゃけん。なんせおまえは、水商売しかしたことないんやからな。あの駄弁屋で朝の五時から起きて、ミツチリ働かしてもうてみイ……朝寝坊のくせはとれるし、デレィッとした身も心も、ピシャッとしまってくるわ」

「やあねえ……私の体、デレィッとなんかしとりやせんよ」

女の声には男に対する甘えがあった。男は尾道で指折りの料亭〃かさはら〃の一人息子、笠原辰吉。辰吉は東京の大学を中退した後、静岡県沼津の漁業組合で働き、最近尾道に帰り、料亭の仕事を手伝いながらも、魚の仲買人として顔をきかせていた。女は、辰吉のあとを追って、尾道にきたらしい。

「ねえ、うちは、あんた一人を頼りにして、伊豆の温泉場からきたんよ……」

「俺は別にたのんだわけじゃないぞ……」

「また、いじわるをいう。夫婦になろういうたんは、だれよ！ 捨てたら、うちはもう死ぬから……」

たちまち涙ぐむ女の肩を抱いて、辰吉は励ましていた。

いずれはおふくろの後を継いで料亭〃かさはら〃の女将になってもらうつもりでいること。そのためにも水商売のアカを落し、尾道の様子や人の気風にもなじんでほしいこと。〃せとうち弁当〃で身分をかくして働くのもそのためであり、大谷守之助や番頭の国戦爺は信頼の置け

る人間だからこそ、住込みで働くことを依頼したのだと。

「心配すんな、俺がおまえを悪いところへやるわけなからうが。当分は『せとうち』で骨惜しみせんと働くこっちゃ。そのうち折を見て、おふくろにも引合わせるけん……」

いい聞かされて、うなづく女をうながして、辰吉は席を立った。部屋には海からの照り返しがあつて明るく、それがこの町の穏やかさを、ひとときわ強調しているようでもあつた。

しかし、辰吉について、一つ書き加えておかねばならない。尾道警察署の刑事たちが、彼の行動をマークしていることを。といっても、笠原辰吉が犯罪に関係しているのではなく、辰吉の東京時代の友人、毛利二郎が四日前、岡山市の旅館から辰吉に電話をかけていたからだ。毛利は東京下谷の信用金庫職員であつたが、千五百万円の公金横領容疑で指名手配中。この情報に尾道警察に入つたのは、辰吉が海そいの旅館で女と逢つていたところと前後していた。

「……笠原は、沼津の漁業組合で働くまえ、東京の新宿でスナックをやつていた。毛利とは、そのころ知り合つたらしい……。ともかく、岡山の旅館から毛利が笠原に電話をかけている。しばらくは笠原に尾行をつけることにしよう」

尾道警察署の捜査課長は、笠原監視を三沢慎吾刑事と同僚の田辺刑事に命じていた。むろん、このことを辰吉は知らない。辰吉は女を連れて、海そいの旅館を出ると、『せとうち弁当』大谷家の場所を教えて、

「さ、元氣出して行けよ。おまえの休みの日には逢うようにするけん。なにか困つたことがあつたら電話して。じゃあな……」

と、穏やかな日射しのなかを去って行った。

尾道の町には魚の匂いがある。尾道駅のすぐ前からは、瀬戸内の島々をめぐるフェリーが發着し、時折フェリーの物音が風にのって聞えてきたりする。

「いらっしやい！ お弁当ですか……」

応待に出たのは従業員の亀世で、女は客とまちがえられてたじろいだ、すぐにも番頭が顔を出して、「笠原さんのお世話で……」と告げると、来意は通じたが、相手の態度は冷たかった。

「ああ、笠原さんのね。旦那さんから聞いてます。けど、新幹線開通でうちも商売減る一方じやけん……あんたにやってもらう仕事があるかどうか」

番頭の国戦爺はジロジロと女の姿を見つめ、追いつきたい風情もあった。

「私、なんでもやります。お掃除でもお洗濯でも、マッサージでも。マッサージの学校へ半年通いましたから、本式なんです」

「ほんなら、いっそのこと、マッサージやった方が稼げるんところがいますか」

その冷たい態度に喰いさがってくれたのは、従業員の亀世で、女は救われる思いで部屋に案内されることになった。

「じゃ、ま、ま、とにかくあがって……。じゃけん、うちはあんまりいい部屋ないけんね」

「ほんなら、ありがとうございます。お世話になります……」

荷物を持ってあがりかけたとき、奥の部屋から亜紀子が出てきた。気づいた亀世が紹介した。

「あ、お嬢さん。この人、きょうからうちで働くことになった……えーと」

「菊地ミツ子でございます」

「菊地！」

みつめ合う亜紀子の顔から、血の気が引いていった。亜紀子にとっては、一刻も忘れたことがない母と同姓同名の女性が、突如として現われたからだ。心の動揺を押しかくしながら、亜紀子は母の面影を探していた。だが、相手は若くはなやかでさえみえる。

「どうぞ、よろしくお願いします」

むろん、ミツ子も相手の娘の視線にハッと思い当り、全身を硬直させたが、自分の身をあかす立場ではない。笠原辰吉を追って、尾道へたどり着いた直後のことでもある。二人は会釈をかわしてすれ違うしかなかった。

「亜紀子が生きていたら……そう、ちょうど、二十歳。でも、まさかあの娘が……」
思い当たったとき、ミツ子の衝撃はさらに大きかった。

二

料亭「かさばら」の女将笠原しのは、尾道では、やり手の実業家としても知られていた。女手ひとつで築きあげた地位は、勝気と如才のなさにあったが、料亭の仕事ばかりでなく、商工会議所にも顔がきき、商業振興会の役員も兼ね、毎日を忙しく飛び歩いていた。辰吉が帰ると